
研究ノート

国際的教養の構築に向けて

伊東 辰彦^{1)*}, 今井 純子²⁾, 道谷 里英³⁾, 大槻 茂実⁴⁾, 岡部 大祐⁵⁾, 齊藤 美野⁶⁾, 白山 芳久⁷⁾

【要 旨】

人類が共通に直面している新たな危機に対応するためには、世界中の人々が世界共通レベルでの教養を持ち、すべての関係者が議論に参加することが必要である。その理想を実現するために、高等教育機関は専門の枠を超えて真剣に議論を深めなければならない。本論文は順天堂大学国際教養学部教員有志が、各々の専門分野の視点から国際的教養の構築に向けた課題や教授法について論じたものである。本論文の目的は、高等教育機関に対する現実的・短期的な専門教育への期待と、人間形成としてのリベラルアーツ教育とを両立させる教育のあり方を検討することである。具体的には、社会学、キャリア発達、異文化コミュニケーション論、翻訳学、応用言語学、公衆衛生学の視点からリベラルアーツ教育の意義や実践例が示された。最後に、研究者自身がリベラルアーツ主義に立脚した意識を強化していくために行うべきことについて議論された。

キーワード：リベラルアーツ教育、領域横断型教育、専門教育

Research Notes

To Establish International Liberal Arts

Tatsuhiko ITOH^{1)*}, Junko IMAI²⁾, Rie MICHITANI³⁾, Shigemi OHTSUKI⁴⁾, Daisuke OKABE⁵⁾
Mino SAITO⁶⁾, Yoshihisa SHIRAYAMA⁷⁾

【Abstract】

Human beings today are confronting entirely new types of global issues. To address these unprecedented challenges, people in the world, as global citizens, must develop cultural literacy and knowledge at a high international standard, and engage in collaborative dialogues to solve emerging problems. To achieve this, academics in higher education institutions are responsible for deepening and extending arguments beyond disciplinary boundaries. In this article, a group of faculty members in the Faculty of International Liberal Arts at Juntendo University, each with his or her own academic expertise, discuss issues and pedagogical approaches in establishing shared understanding of international liberal arts. The paper aims to explore ways to balance the societal expectation for higher education institutions to provide short-term, practical vocational training with the original goal of liberal arts education to nurture humanity. In particular, the authors discuss the meaningfulness of the liberal arts and introduce practices in the faculty from disciplines including sociology, career development, intercultural communication, translation studies, applied linguistics, and public health. The paper concludes by suggesting what individual researchers should do in order to enhance their shared awareness and application of liberal arts principles.

Key words: Liberal arts education, Interdisciplinary education, Professional training

¹⁾ 順天堂大学・国際教養学部 (Email: t.ito.fo@juntendo.ac.jp)

²⁾ 同上 (Email: j-imai@juntendo.ac.jp)

³⁾ 同上 (Email: r-michitani@juntendo.ac.jp)

⁴⁾ 同上 (Email: s.ohtsuki@juntendo.ac.jp)

⁵⁾ 同上 (Email: d-okabe@juntendo.ac.jp)

⁶⁾ 同上 (Email: mi-saito@juntendo.ac.jp)

⁷⁾ 同上 (Email: shirayam@juntendo.ac.jp)

* 責任著者：伊東 辰彦

[2020年9月29日原稿受付] [2020年11月27日掲載決定]

1. はじめに

2020年の今ほど、世界的レベルでの教養が必要とされている時はないかもしれない。新型コロナウイルスの世界的流行は、我々に極めて切実な形で、世界が連帯してこの問題に取り組まねばならないことを突きつけている。例えば、マスクをする、しないという問題一つをとっても、マスクをするとどのような仕組みで、どうウィルスの飛散を減らすことができるのか、さらにはウィルスとはどのような性質をもっているのか。このような点について、世界中の人たちが一般的知識と、それに従って行動する意識を持つことができれば、無理に法律で規制し、いたずらに議論に時間をかけることなく、一定程度の安全対策が迅速に世界中で可能になるかもしれない。

しかし、現実にはそうなっていないことへの苛立ちが、暴力的な行為につながったり、根拠のない情報の流布につながったりしているのであろう。そうした無理解、無秩序に立ち向かうために必要なのは、まさに国際的な教養の涵養ではなかろうか。危機にさらされた時、とくに目に見えない危機に直面した時、人間が過去にどのような行動をとったかを冷静に学ぶことから、新たな危機に対応する知恵を見つけることができるだろう。そして、そのことをしっかりと教える教育の仕組みが必要なのである。

こうした事例は、まさに近年の世界情勢の中で、顕著に現れて来ているのではないか。例えば、福島原発事故、地球温暖化の進行、プラスチックゴミの回収問題など、すぐにでも手をつけないと、将来の世代に禍根を残すことになるのは明白であろう。国連によるSDGs（持続可能な開発目標）の採択も、決して絵に描いた餅にしてはいけない問題であり、その実現のためには、当然ながら、世界共通レベルでの教養が必要である。この場合の教養とは、たんに知識を共有することではなく、それに従ってどのような行動を取るのか、それによってどのような結果（良いことも悪いことも）が予想される

のか、全ての関係者（地球市民）が、議論に参加することである。その基盤として、国際教養の重要性が極めて高まっているといえよう。

このような理想を実現するために、教育機関、とくに高等教育機関は、世界に向かって情報、意見、勇気を発信し続ける場所でなければならない。そのための枠組みづくりが急務であり、そのために、大学に関係する教員が、専門の枠を越えたところで、真剣に議論を深めなくてはならないのである。そして、拙著『リベラルアーツという波動』（2019）でも述べたように、その営みが、必ず世界平和の構築につながるように、全ての関係者がそのために努力することに価値を見出すことができるような、そうした教育を用意しなければならないのである。

本論文の目的は、順天堂大学国際教養学部を事例として、高等教育機関に対する現実的・短期的な専門教育への期待と、人間形成としてのリベラルアーツ教育とを両立させる教育のあり方を検討することである。具体的には、異なる専門領域からの順天堂大学国際教養学部教員有志が、各々の専門分野（社会学、キャリア発達、異文化コミュニケーション論、翻訳学、応用言語学、公衆衛生学）の視点から国際的教養の構築に向けた課題や教授法について、リベラルアーツ教育の意義や実践例を紹介しつつ、探索的に検討する。最後に、研究者自身がリベラルアーツ主義に立脚した意識を強化していくために行うべきことについて議論する。

2. 本論の構成と焦点－リベラルアーツ教育と専門教育の両立

リベラルアーツ教育においては、必ずしも「唯一の正解」は重視されない。むしろ、多層的な専門知を介した思考のプロセスそのものが「答え」とも考えられる。したがって、学生や教員の活発なディスカッションはそれ自体が「答え」ともいえよう。当然ながら、個々の社会成員によるそうした「答え」の蓄積こそが、長期的視点にたてば民主主義のパフォーマンス向上に帰

結することが想定される。その意味で、前節で示したようにリベラルアーツの姿勢は本来的には大学を超えて社会全体に広く普及することが強く望まれるといえる。大学がリベラルアーツ普及の旗手を担うのは、大学が長期的な視点に立って知の社会還元を実践できたからに他ならない。

しかしながら、現在の大学はグローバルレベルの経済競争を背景として、高度人材の輩出や専門知識の技術的応用といった役割も同時に強く求められている。こうした需要が少子化時代の大学の「生き残り戦略」と共振することは想像に難くない。プログラミングをはじめとした経済的需要の高い専門教育を重点とした組織再編や奨学金制度の充実や補助金の誘導による産学官連携の促進などはその典型といえよう。例えば、カリフォルニア大学アーバイン校は「eスポーツプログラム」を2015年より開始し、大学としての特色を強調する戦略を採用している（日経新聞、2018）。また、日本の郊外社会における「地元大学」の地域社会への貢献に社会的アプローチから着目した大槻（2018）は、国の補助金に誘導された大学側の積極化という形で学官連携の質が近年になって向上したことを事例調査から報告している。こうした国内外の事例は、大学の「生き残り戦略」としての専門知識の積極的な活用の試みと解釈できる。

本研究は、人間形成の根幹と位置付けられるリベラルアーツ教育と、グローバルレベルの経済競争に呼応して短期的な生産性を重視した専門教育の両立を、盲目的に批判するものではない。むしろ、この両立が市民社会からの要請でもあるという側面を踏まえれば、そこにも一定の正当性は認められるべきであろう。問題は、日本の大学においてその両立の実践方法がまだ定着していないという点ではないだろうか。しかしながら、リベラルアーツ教育と専門教育の両立は、演繹的な思考のみで導出できるものではない。むしろ、その両立をめざした教育現場における経験的なデータの蓄積を通して、実践

的にその道筋を見出すことが肝要であろう。そこで本研究では、このようなリベラルアーツ教育と専門教育の関係性を教育現場の視点から捉える。より具体的には、リベラルアーツ教育を推進する高等教育機関の現場で専門教育との両立を日々模索する教員の視点から、両立の方法を探索的に検討する。

次節以降の構成について触れておきたい。第3節ではキャリア教育とリベラルアーツ教育の両立を検討する。キャリア発達の見地から道谷里英は、「現実的な結果」が求められることが多いキャリア形成におけるリベラルアーツの必要性を整理する。いわば、第2節で示したリベラルアーツ教育と専門性の両立が最も先鋭的な形で求められる教育場面から、その両立の意義を検討する。

第4節では、（異文化）コミュニケーション論の見地から岡部大祐が、個別領域にとらわれないリベラルアーツ教育の道筋を提示する。リベラルアーツ教育が人間形成の根幹であるならば、個別分野にとらわれない領域横断的な学びこそがリベラルアーツ教育に符合する。だとすると、リベラルアーツ教育と専門教育の両立のみならず、リベラルアーツ教育に内包される個別領域を結びつけることも現実の教育現場では求められることとなる。

第5節では、学びの主体について検討する。リベラルアーツ教育が人間形成である以上、教員もまた学びの主体でもある。では、いかにして教員も学生も主体的な学びの実践者となり得るのか。この問いを追究するにあたって、リベラルアーツ教育の蓄積に富む欧米の教育実践との比較検討が有効であろう。この点を踏まえ、齊藤美野は翻訳学の見地から主体的な学びの方法論を検討する。

第6節では、今井純子が応用言語学とりわけ英語教育の見地から、英語教育とリベラルアーツ教育の課題と可能性を整理する。地球市民として人間形成を担うリベラルアーツ教育においては、相互理解を深める手段として外国語習

得は必要不可欠なスキルと位置づけられる。その一方で、外国語教育は、スキルとスコアを重視するとその反動として、人間形成という本来的な教育的意義から逸れるリスクをとまなう。第6節ではこの両立を目指した事例と実現可能性に留意して検討する。

第7節では、白山芳久が公衆衛生学の見地から、リベラルアーツ教育とグローバル・ヘルスの結びつきを整理する。グローバルレベルでの健康に関する課題の追究は、必然的に文理融合をはじめとした領域横断的な教育の実践を要請する。しかし、大学生活は無限ではなく、時間的制約がある中で効果的かつ多様な学びを促進していく必要がある。では、健康課題についていかにしてリベラルアーツ教育は可能か。ゼミナールでの実践から検討する。

第8節では、第3節から第7節で提示された教育現場における教員の課題認識を踏まえた上で、検討の結果を述べ、リベラルアーツ教育研究の今後の展望を提示する。

3. キャリア教育とリベラルアーツ

キャリアという言葉は多面性を持つがゆえに、時代や理論家によって焦点を当てる側面が異なりうることが知られている（渡辺他，2018，12）。教育機関におけるキャリア支援に対しては、就職支援や特定の職業教育が期待されることが多い。しかし、近年では職業だけでなく人々の生き方全体をどのようにとらえ、個人の生活の向上を実現するかをも視野に入れている。例えば、文部科学省（2004，7）ではキャリアを「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖、及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」と定義している。このようにキャリアという概念において個別性や主体性（agency）に重きが置かれるようになった背景として、社会経済環境の変化により、予測可能なキャリアパターンを描きづらくなってきたことが指摘されている（Savickas，2012）。個々人が育ってきた環境、周

囲の大人たちの助言などによって将来のイメージを持つことが困難な現代に生きる若者たちにとって、目の前の現実を直視し、多様な側面から分析できる力がこれまで以上に必要となっている。こうした力を培うには、特定の専門分野で、特定のものの見方を学ぶだけでは不十分である。多様なバックグラウンドをもつ他者との対話を通じて、時には自身のこれまでを否定されるような経験を積み重ねながら、自己を新たに更新し続けることを恐れない態度を身に付けていくことが、変化の激しい社会で生き残るために不可欠である。キャリア形成のためにリベラルアーツを学ぶ意味はこの点にあると考えられる。

上記のことは、決して専門性が必要でないということの意味しない。社会人になる前の最後の準備期間としての高等教育においては、今を生きるために必要な知識・技術を身に付け社会的・経済的な自立を果たしていけるよう指導する必要がある。リベラルアーツを学ぶ過程で培った態度によって、自分が学んだものの見方を健全に批判できることが、専門分野での学びをより良く生かすことにつながると考えられる。

産業界においても、求められる人材像として「自律型人材」が提言されて以来（日本経済団体連合会，2006）、採用戦略において自ら主体的に考え行動できることが基礎的な人材要件となっている。現在のコロナ禍において、ますますその必要性が高まっている。リベラルアーツ教育は、一人ひとりの人生・キャリアを豊かにするとともに、社会で活躍するために必要な力を育むアプローチではないだろうか。

4. リベラルアーツ教育を架橋するコミュニケーション論的まなざし

SDGsをはじめ、災害や感染症など、特定の学問領域を超えた領域横断的アプローチが求められており、アカデミア内の議論のレベルに留まらず、現代社会がそれを要請するという社会

歴史的な文脈が生じている。マイケル・ギボンズらは知識生産の形式を2つのモードとして表現し、専門家がその学問領域の内部で生み出す知識の形式（モード1）と、学問領域の内部ではなく、何らかの社会的課題に複合的な知見が持ち寄せられた結果として生み出される知識生産の形式（モード2）として区別している（Gibbons et al., 1994）。リベラルアーツ教育は、モード2的な知識のあり方が求められる社会歴史的な文脈が設定されている今、新たな社会的使命を担うことが期待される。

しかし、リベラルアーツを掲げる大学が多種多様な専門性を有する研究・教育者を揃えたとしても、専門同士を越境させる具体的な方法論をもたないならば、新たな知を創造することも、その教育を実現することも困難である。それを打開するひとつの鍵はコミュニケーションであろう（ここでいう「コミュニケーション」とは情報伝達理論的な、意味を所与とした、その効率的な移動ではなく、記号を媒介した意味生成の過程を指す）。そしてコミュニケーション論は、意味が生まれる過程への突き放したまなざしと、その解明のための高い抽象度の概念や理論を備えている（cf. 小山, 2012）。専門分野を超えた協働では、それぞれの学問分野が所与としている存在論や認識論といったことまでが異なっている可能性を想定せざるをえない。そのためリベラルアーツ教育を実現するためにそのアクターたちがコミュニケーション論的な視点をもつことは有用であろう。本学部では「基礎演習」を担当することを経て、プレゼンテーション、ファシリテーションという実践のみならず、それについての一定のメタ言語を備えた教員の数が増加しており、リベラルアーツ教育に必要な領域を超えた対話可能性、モード2的な知の創造の礎が築かれつつあるように思われる。

5. ワークショップ形式の有効性の検討：翻訳学教授の場合

リベラルアーツ教育を実施する授業の運営方

法として、学生間および学生・教員間の積極的な学び合いを促すワークショップ形式の有効性を検討することも、日本の高等教育でのリベラルアーツ教育研究において有用であろう。本節では、翻訳学（Translation Studies）教授の場合の活用方法を、実践をもとに例示し、ワークショップ形式の授業がリベラルアーツ教育において有効である可能性を検討し始める契機としたい。なおここではワークショップの定義を、安齋・塩瀬（2020, 110）をもとに、「主催者から一方的な情報伝達をするのではなく、参加者が主体的に参加し、[中略]学び合う場」とする。

学生に学び合いの場を提供するワークショップ形式の授業は、欧米の大学・大学院における翻訳学の科目において実践されている（Venuti, 2017）。翻訳学が高等教育機関において学問分野として独立したのは、1970年代の欧米においてであり、日本での広まりは2000年頃からである。先を行く欧米の高等教育機関における翻訳学の教授法を参考に、日本の高等教育においてもワークショップ形式で翻訳学を教授したいところである。その際、上記の定義中の「主体的に参加」という点を実現するためには、「主催者」（授業の場では教員）に、そして「参加者」である学生にもファシリテーションの技術が必要だろう。

ファシリテーションは、「課題解決のプロセスを促進したり、容易にしたりする行為」（安齋・塩瀬, 2020, 184）であり、ファシリテーションが巧みに行われると参加者から多様な意見を引き出すことができる。翻訳理論を教授する科目においては例えば、次のように理論の教授と分析課題をセットにすることからワークショップ形式を取り入れ、学生間、加えて学生・教員間の学び合いを促進し、また容易にしようと試みている。1) 教員による理論の解説と分析例の提示、2) 分析課題の指示、3) グループ内ファシリテーションのための指示、4) 学生は3～4名のグループワークにて当該理論を用いた分析を実践し、5) 成果物の共有をし、6) 学生間

及び教員から学生へのフィードバックを行う。1) は、課題に取り組むうえで必要となる最小限の知識の伝達であり、2) と 3) は課題への参加を容易にするための調整、そして 4) から 6) は学び合いの促進である。例えばこのような形で、ファシリテーションの技術を活用しながら、ワークショップ形式で翻訳学を含むリベラルアーツ教育を行うことにより、主体的に学び合うことのできる学習者が増えることが期待される。

6. 英語教育×リベラルアーツの可能性

英語はグローバル社会を牽引する「グローバル語」(e.g., Crystal, 2012) として認知されつつあり、本学部 1 年英語は Interactive International English (IIE)、2 年英語は English for Global Citizenship (EGC) と題されている。本号に投稿した実践報告(今井)では、学部黎明期に内容言語統合型学習(CLIL)(e.g., Coyle, 2010)の背景となった linguacultural 理論(e.g., Diaz, 2013)やプログラムの独自性(多様性重視少人数編成クラス、協働学習、自律学習支援、複言語主義)を概観した。その上で試験対策強化の要請に応えつつも、地球規模の課題を掲げる EGC に SDGs を導入して CLIL をどのように維持してきたか、今後の課題と共に考察した。

以上を前提として、本学における英語教育とリベラルアーツを交差させた時、どのような相互作用が期待できるのだろうか? 草創期より本学部の英語教育が育ててきた能力は、(a) 異文化との出会いや他者との関わりを通しての自己理解、(b) 当たり前を疑うクリティカルで論理的思考の交流、(c) 複眼的視点を持った問題解決とその発信である。「何をどのように教えたら良いのか?」は、CLIL に関わる英語教員が常に気に留めていることであるが、学部全体の大きな動きを振り返ると、個々の言語スキルや予備校的な試験問題演習を重視したあまり、「内容」が失われた代償も皆無ではない。実際、2018 年以降 IIE においては教材や評価方法の試

行錯誤が毎年繰り返されており、今井(2017)で紹介したような協働学習の風景や、異文化への気付きの機会の作品への反映が年々見られなくなっている。その結果、地球規模の課題の理解と分析に必須と思われる文化相対主義的な視点が育たないまま 2 学年に上がってくる例も増加しているように見受けられる。

言語教育においてスキルやスコアに焦点が当たりやすい時代だからこそ、CLIL を維持した内容学習を通じて、他科目にも通じる知識や地球市民として時代を生きる力を育て、ともすれば英語科目内で失われつつある「内容」を他科目で補填する。科目が共鳴し相互反応を起こすようリベラルアーツの可能性を模索していけたらと考えている。

7. リベラルアーツ教育とグローバル・ヘルス

国際保健政策学は、とりわけ領域横断的な学問分野で、限られた大学院大学で社会医学系講座として開講されてきた。公衆衛生学の知識、疫学・統計学がコア・スキルとして必要であるが、国家間もしくは国境を超えて、政治・経済・社会の構造、言語・文化など、人々の健康に関わる多岐に亘る知の統合、そして集団レベルでそれらの要素をコントロールしようと試みる実践の力が求められる。

グローバル・ヘルスについて学部レベルから学べる本学の国際教養学部において、各学生が授業で積み上げてきた内容を複合的な目で組み合わせ考えられるようにするには、一人の小手先の知識だけではどうしようもない、社会のリアルな課題を突きつけて協働せざるを得ない環境を作り出すことではないかと考える。

奥(2020, 33)は、SDGs 時代に、文理融合の教養教育ができることを考察し、「最新の科学的知見に基づくと、現状はどうで今後どう展開し得るのか、可能な限り多様なシナリオを創作できるよう支援する内容」があり得ると述べている。

環境問題でも感染症対策でも、自然科学系知

見を読み解くのに、数的 (numeracy) や統計 (statistical) リテラシーは必須である。また、データベースから目的の知見を探り当てるためには情報 IT スキルも必要となる。実は、健康を決める力、ヘルスリテラシーにも、健康にかかわる統計情報を読み解く力「統計リテラシー」が含まれる。産業界からの需要拡大という観点から、IT や統計の苦手意識を克服しスキルとして身に付けたいという学生ニーズが今後増えていくだろうと見込んで、4 年前 (2016 年) に統計リテラシーゼミナールを国際教養学部で立ち上げた。

情報・理工系の学部の学生と競ってプログラミングなど高度なスキルの習得を目指しても、それだけでは十分ではなく、奥 (2020) が提案する「多様なシナリオを創作できる」という次元においては、アートやセンスが求められることは自明である。リベラルアーツ教育でこそ培われる現在・過去・未来の知見と、身に付けたスキルとをバランス良く組み合わせて、順天堂ならではの健康課題の解決に協働して貢献し得る人材を育てることにコミットしたい。

8. おわりに

以上、順天堂大学国際教養学部において、日々の実践の中から見えてくる経験値を踏まえつつ、今後の国際的教養のあり方について、さらに綿密な検証と、それに基づいての将来的プランの策定に向けての第 1 段階として、7 人の教員による考えをまとめてみた。ここで本稿の結論を述べておきたい。前提として、筆者たちは「リベラルアーツ」という学問領域を構築することを企図しているのではない。その上で、本研究の各節から示されたのは次の共通点であろう。すなわち、専門領域が異なる研究・教育の実践者および関係者が、共通して人間形成としてのリベラルアーツ教育を日々の専門教育の実践の中で継続的に行っているという点である。だとすれば、そうした継続を実現させるための研究・教育の実践者の日々の姿勢こそが、リベ

ラルアーツ教育と専門教育の両立の要と考えられるのではないだろうか。当然ながら、こうした個別の教員の姿勢をサポートする上では、継続的な教員間の相互協力や情報共有が希求されるといえよう。本論もその試みの成果といえる。

しかし、これはあくまでも、この学部での最初の試みであり、今後は学部全体での相互協力関係に拡大し、それぞれが優れた専門性をもつ各教員の知見を全体で共有しながら、コロナ後の世界で必要とされる新しい教養のあり方を追求して行かなければならない。そのためには、構成員全体での、日常的な相互の意思疎通、互いの学問的関心の共有、組織としての将来的ビジョンの維持と、その継続的検証が必要になるだろう。この作業は、一見すると、これまで自分の専門を究めることに注力して来た私たち研究者にとって、自分の学問を疎外するよう感じられるが、実は、他者からの視点を導入し、自分の専門を客観的に見直すことによって、自らの学問分野における新しい展望を見つけるための、極めて有効な手段なのである。経済学者 K. E. ボールドィングが、ミシガン大学において、生物学的モデルに触発されて 20 世紀経済学のパラダイム転換に貢献したように、経済学を含む多くのノーベル賞受賞者を輩出しているマサチューセッツ工科大学 (MIT) が、そうした、人文科学、社会科学、自然科学の領域を横断する学際的環境 (精神的にも物理的にも) を極めて意識的に維持してきたことは、世界的にもよく知られている。その意味で、私たち研究者自身が、リベラルアーツ主義に立脚した意識をさらに強化していかなければならない。

リベラルアーツ教育と専門教育の両立について検討した本論考は、リベラルアーツ的視点に価値を見出し、異なる専門分野を繋げての研究・教育者の協働により実現したものである。前述したように、本論考自体がリベラルアーツの視座の実践なのである。今後、この研究を継続していくための学内インフラの整備、社会的認知の形成、他の学術機関との連携のために、財政

的基盤の整備も肝要であり、そのためには大学行政の理解も得ながら、学部の教育に携わる全教職員で、各分野における教養のあり方についての議論を活発化しなければならない。この議論への参加を広く呼びかけていきたい。共有できる情報をグローバルな視点から収集し、それらを議論する効率的なプラットフォームを設定する必要もあるだろう。具体的には、学部のコンピテンシーを策定する中から見えてきた本学に特徴的な教育目標の理念の確認とクラスにおけるその実質化、正しいアセスメントの実現を目指す共同作業の重要性、カリキュラムツリーやポートフォリオの導入による教学内容の可視化、FDの活発な運用による教員間の情報共有などに向けて、本研究の成果を還元していくことが望ましい。

引用文献

- 安斎勇樹・塩瀬隆之 (2020). 『問いのデザイン: 創造的対話のファシリテーション』. 学芸出版社.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge: Cambridge University.
- Crystal, D. (2012). *English as a global language* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University.
- Diaz, A. R. (2013). *Developing critical languaculture pedagogies in higher education*. Bristol: Multilingual Matters.
- Gibbons, M. (Ed.). (1994). *The new production of knowledge: The dynamics of science and research in contemporary societies*. London: Sage.
- 今井純子 (2017). 「内容言語統合型授業 (CLIL) における英語ライティング指導—作文とディスカッションの内容分析」『順天堂グローバル教養論集』第2巻, 80-86頁.
- 伊東辰彦・森島泰則 (2019). 『リベラルアーツという波動』. 学研プラス.
- 小山亘 (2012). 『コミュニケーション論のまな

- ざし』. 三元社.
- 文部科学省 (2004). キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801.htm (情報取得日: 2020年9月25日)
- 日本経済団体連合会 (2006). 主体的なキャリア形成の必要性と支援のあり方—組織と個人の視点のマッチング. <https://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2006/044/honbun.html> (情報取得日: 2020年9月25日)
- 日本経済新聞 (2018) 「エースをねらえ!—eスポーツで世界制覇遊びの進化論」(2018年6月14日電子版記事). <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO31699820T10C18A6TCP000/> (情報取得日: 2020年9月25日)
- 大槻茂実 (2018). 「地域資源としての大学」石田光規 (編) 『郊外社会の分断と再編—つくられたまち・多摩ニュータウンのその後』. 晃洋書房.
- 奥正廣 (2020). 「日本の教養教育の過去・現在・未来」『日本創造学会論文誌』第23巻, 1-35頁.
- Savickas, M. L. (2012). Life design: A paradigm for career intervention the 21st century. *Journal of Counseling & Development*, 90, 13-19.
- Venuti, L. (Ed.) (2017). *Teaching translation: Programs, courses, pedagogies*. London: Routledge.
- 渡辺三枝子・岡田昌毅・河田美智子・黒川雅之・田中勝男・中村恵・堀越弘・道谷里英 (2018). 『新版 キャリアの心理学 第2版』. ナカニシヤ出版.
- [執筆分担]
第1節 / 第8節…伊東辰彦
第2節…大槻茂実
第3節…道谷里英

第4節…岡部 大祐
第5節…齊藤 美野

第6節…今井 純子
第7節…白山 芳久